

研究ノート

竹内敏晴・サロイヤン・アルメニア

横 家 純 一

1. 竹内敏晴

竹内敏晴[1925-2009]という演出家がいる。作家でもある。『ことばが劈(ひら)かれるとき』(思想の科学社1975)など、多くの作品がある。何年前かに、椋山でも、人間関係学部の三井(みい)悦子先生の計らいで、講演をしていただいた。なかでも有名なのが、「話しかけのレッスン」であろうか。ある人が、3、4メートルぐらい離れたところに立つ5人の内の1人の背中にむけて、声をかける。すると不思議にも、その声を背中で聴いた人が感じとる、というものである。20年以上前に、ぼくの授業でもやってみた。「あの一、ハンカチ、落ちましたよ!」と声をかけられた人が、背中で、その声をキャッチするという“奇跡”が起こった。それを目撃したぼくたちは、みんな驚いた。通常、人のメッセージは、耳で聞くことが多いが、からだで聴くこともできる、という教えの瞬間であった。

この竹内敏晴が、『老いのイニシエーション』(岩波書店1995)という本を書いた。「ほぼ生れながらの難聴、そして十代の聾(ろう)に近かった聴覚言語障害」(同書23頁)という自らのライフヒストリーをむき出しにした、という。とりわけ、竹内が30年築いてきた自分の家庭を捨て、再婚した相手、笙子からの竹内へのセリフは鋭い。

○「生きるってことは、取り返しのつかないこと (下線1) をしてしまうことじゃないかしら？」と、笙子は言う。(同書49頁)

○ひとつを選ぶことはひとつを殺すこと。自分の中のひとりの自分を殺すことだ。しかし、と私は、自分を引き据えるようにして考え始める——自分の中のひとりを殺すこと (下線2) によってのみ、私は自分を離れて他者へ向って出てゆくこと (下線3) ができるのではないか。(同書54頁)

○私は「あなた方」を捨てました。そういう私を理解して許して下さいってあっちに (下線4) 言いたいわけ？ (同書82頁)

このように、生きることを「取り返しのつかないこと」(下線1)と断言し、「自分の中のひとりを殺」(下線2)し、「他者へ向って出てゆくこと」(下線3)という、コミュニケーション

ンの、いわば、神髄を看破している筈子にとっては、竹内の態度は、やや生ぬるい。捨てられた「あっち」(下線4)、つまり、竹内のもとの家族に、捨てた私を許してもらおうなんて、できやしない。そんな選択は、新しい家族にとっても脆うい。そんなこともわからないのか、というパートナーとしての叫びであろう。

2. サロイヤン

だが、ここでの関心はライフヒストリーではない。この本の中に出てくるウイリアム・サロイヤン [1908-1981] の短編「わが名はアラム MY NAME IS ARAM」(1940) 中の「哀れ、燃える熱情秘めしアラビア人 The Poor and Burning Arab」からの、つぎのような引用だ(注1)。ここでは、アルメニアからの移民であるおじさんとその友人の言動—コーヒーをすすったり、タバコをふかしているだけで、いちども口を開かない—について、アメリカ生まれの甥っ子、私(アラム)がその母にこう問いかける。

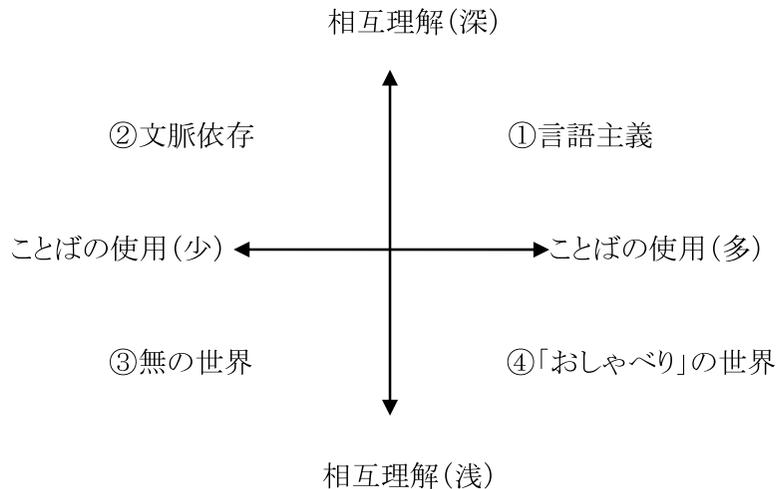
<p>Some people talk when they have something to say, my mother said, and some people don't.</p> <p>How can you talk if you don't say anything? I said.</p> <p>You talk without words. We are always talking without words.</p> <p>Well, what good are words, then?</p> <p>Not very good, most of the time. Most of the time they're only good to keep back what you really want to say, or something you don't want known.</p> <p>Well, do <i>they</i> talk? I said.</p> <p>I think they do, my mother said. They just sit and sip coffee and smoke cigarettes. <u>They never open their mouths, but they're talking all the time.</u> They understand one another and don't need to open their mouths. They have nothing to keep back.</p> <p>Do they really know what they're talking about? I said.</p> <p>Of course, my mother said.</p> <p>Well, what is it? I said.</p> <p>I can't tell you, my mother said, because it isn't in words; but they know.</p>	<p>母：何か言いたいことがあるとき話す人もいるけど、そうでない人もいる。</p> <p>私：何も言わないで話すなんてことできるの？</p> <p>母：言葉なしで話すことがあるのよ。私たちはいつも言葉なしで話しているのよ。</p> <p>私：だったら、言葉はなんのためにあるの？</p> <p>母：なんのためにもならないね、たいてい。たいていはね、本当に言いたいことを隠したいとき、あるいはね、誰かに知られたくないことがあるとき、役に立つのよ。</p> <p>私：とにかく、お・じ・さ・ん・達・の場合、話すことがあるの。</p> <p>母：あると思うよ。コーヒーを飲んだり、タバコをふかしているだけで、<u>一度も口を開かないけど、いつも話しているのよ。</u>お互いわかりあっているから、口を開く必要がないのよ。隠すことなんて何もないから。</p> <p>私：おじさん達、話していることほんとにわかっているの？</p> <p>母：もちろん。</p> <p>私：それって何？</p> <p>母：教えてあげられないわね。だって、もともと言葉じゃないから。でもね、おじさん達はわかっているの。</p>
--	--

下線部の竹内訳は、「いちども口を開かなかつたけれど、でも、いつも話をしていたんだよ」となる。「おしゃべりをする」世界の住人、アラムにとっては、口を開く“say”があつてはじめて、話をする“talk”が成立する。口を開くことこそが、コミュニケーションの前提条件だ。“say”なしの“talk”はありえない。ところが、おじさんやその友人の生活世界では、“talk without words”、つまり、“say”なしのコミュニケーションが可能だ。それを、文脈依存の世界、と言い換えてもよい。

竹内は言う。「人が言語以前の存在全体で思い詰めていることと共に生きている、ということ」（竹内 1995：146）、と。何かは言語化される前に、からだは思い詰めているのだ。それは、そう簡単には、言語化できないものだ。それなのに、「話してくれなければ、なにもわからないじゃないか “If you don't talk, I can't understand.” (Saroyan 1958:359)」という質問は、「ことばというものの重さとひろがり」を軽視し、「ことばを語れないものを嘲（あざけ）ること」になるのだ。竹内の指摘は、きつい。「『話してくれなきゃわからない』ような奴が、聞いたからといってなにがわかるというのだ」（竹内 1995：149-150）。このようなコミュニケーションをただ単に、送り手の技法と捉えていると、ここでいう受け手の重要性、さらには、送り手と受け手を包み込む関係性を見失うことになる。

そこで、より実態にせまるために、相互理解の度合い（タテ軸）と使われることばの量（ヨコ軸）で、対人的コミュニケーションをめぐる四つの理念型を考えてみる（図1参照）。第一象限は、ことばが多くて、理解が深い「言語主義」タイプ。第二象限は、ことばは少ないが、理解が深い「文脈依存」タイプ。コミュニケーション論の用語で言えば、前者が「ロー・コンテクスト」で後者が「ハイ・コンテクスト」となろう。第三象限は、ことばも少なく、理解も浅い「無の世界」。第四象限は、ことばは多いが、理解が浅い「おしゃべり」の世界、となる。

図1：四つのコミュニケーション

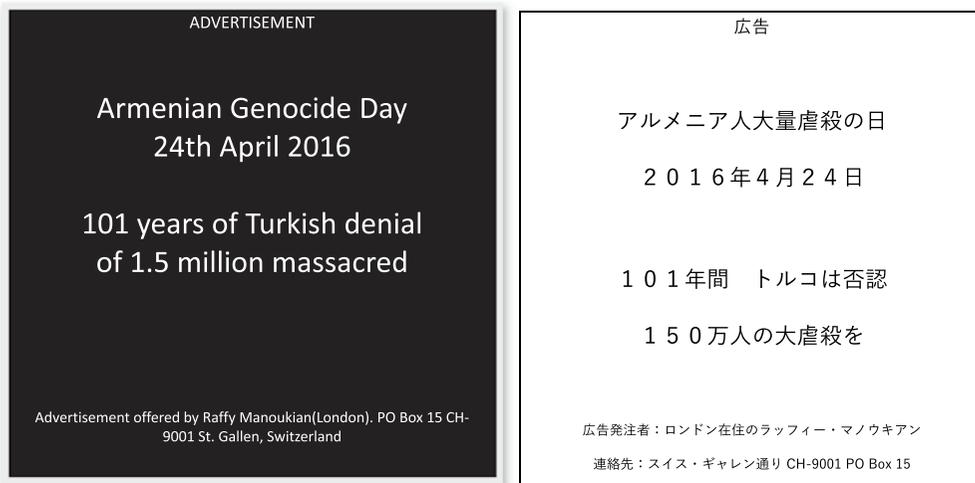


通常、ことばの使用が多くなればなるほど、理解は深まるが(①の言語主義)、ただの「おしゃべり」に陥る場合もある(④の「おしゃべり」の世界)。人の世は、話せばわかってもらえる、聞けばわかる、というほど単純ではないからだ。ことばを尽くしても相互理解に到達しないことがあるように、逆に、サロイヤンが描く、“talk without words”のように、ことばが驚くほど少なくなつて、文脈が共有され、相互理解が得られる場合もある(②の文脈依存)。とりわけ、言語障害であった竹内にとって、話し尽くせないことはあまりにも多い。「話してくれなければ」という態度は、人間同士の相互関係を閉ざす「無知の殺人剣」にもなる。(同書 15)

3. アルメニア

こうして、我々はようやくサロイヤンの祖国、アルメニアにたどりつく。まず始めに、一枚の新聞広告(図2参照、現物はB5サイズ)がある。言うまでもなく、ロンドンに住む Manoukian 氏が出した広告である(注2)。文書量が少ない分、よりインパクトがある。訳してみよう。

図2：ニューヨーク・タイムズの新聞広告(2016年4月23日)



しかし、これだけを見てその中身を理解することは、たいていは無理だ。どうして新聞広告で、2016年4月24日を、アルメニア人大量虐殺の日として世界に対して告知しなければならないのか。しかもそれを、当事者のトルコが101年間も否認し続けているのはなぜか。150万人ものアルメニア人が虐殺されたのに。ここでは、補助線として、「ドイツ議会が『虐殺』認定決議」と題した、つぎの新聞記事を使う。

第一次大戦中の1915年4月、オスマン帝国の首都だった現イスタンブールで、アルメニア人の知識人らが連行されたのを手始めに、アルメニア人の大量殺害や追放が相次いだ。アルメニア側は「犠牲者約150万人」とするが、トルコ側は「30万～50万人程度」で組織的な虐殺はなかったと反発している。(朝日新聞2016年6月3日)

トルコ側は、組織的な虐殺はなく(つまり、政府責任はない)、犠牲者数もアルメニアの主張は誇張したもの、つまり事実を踏まえてない、としている。この二つを読み合わせると、いまから105年前に、トルコ領内の多くのアルメニア人が殺されたのに、トルコ政府はその責任を認めていない、と批判するアルメニア人がロンドンに住んでいること、そして、ドイツ議会がようやく今になって、その虐殺を認定したということ、がわかる。つまり、大量虐殺が行われたにもかかわらず、トルコ政府は謝罪どころか、その認定すらしていないという事実を知ってはじめて、我々は先のニューヨーク・タイムズの新聞広告が正しく理解できるのだ。ここに、英字新聞の深さと、世界認識における覚醒力がある。100年以上前のできごとに対する、執拗な追及をする個人ないし集団の営みを世界に対してさらけ出してしまっているのだ。

つぎに、最近のアルメニア情勢で気になるのは、アゼルバイジャンにあるナゴルノ・カラバフだ(注3)。日本の新聞報道はつぎのようなものである。

91年に、住民の8割を占めるキリスト教徒のアルメニア系市民がアルメニアへの編入を求め、独自の共和国樹立を宣言した。イスラム教徒の多いアゼル側は独立を認めず戦闘に発展。(日経新聞2016年4月4日)

アゼルバイジャンを支持するのはトルコ、自治州を支持するのはロシアおよび海外の富裕なアルメニア系住民。シリア情勢などで、ロシアとトルコの緊張が高まると、ナゴルノ・カラバフもその影響を受けやすい。

この問題に関する英字新聞のタイトルは、「Haven Amid Ethnic Conflict」とあり、民族間の戦いの真ただ中にありながらも、ひと休みする都市、という落ち着いた表現だ。ところが、このニューヨーク・タイムズの記事は、「Russia tends to lean toward Armenia in the conflict, though Moscow sells weapons to both sides」と、このような緊張を政治に、そしてさらに商売に利用している者をはっきり特定する。と同時に、そうした緊張の本当の被害者をこう記述している。

At school No. 3, children's drawings adorning the walls show in crayon and colored pencil the smoldering fight that is all they have ever known: a tank in a mountain landscape; men marching with rifles.

All boys join the army. Asked whom he would fight in four years when he signs

up, David shrugged at the ridiculous question. "Our neighbor, of course," he said.

[New York Times 2016年4月20日]

訳してみる。第三小学校の壁を飾っているのは、子どもたちがクレヨンや色鉛筆で描いた、くすぶり続ける戦闘シーン—子どもたちは、これ以外の生活を知らない—、つまり、山あいを走る戦車やライフル銃を持った兵隊の行進。もうすぐ徴兵されるこの David 君にとって、アルメニア人としての戦いは不可避であり、その敵も、お隣のアゼルバイジャンと決まっている（注4）。精力的に現地取材する記者に対する、迷いのない、明るそうな答えの中に、他民族への、正当化された憎しみを見つけることは、たやすい。

4.

さて、以上、竹内敏晴を魅了したサロイヤンの文学、そして、その祖国アルメニアの情勢について、主に、新聞記事をから探ってみた。ここでは最後に、いくつかの文献を手がかりに、アルメニア社会の成り立ちやその歴史について簡単に振り返ってみたい。

『アルメニアを知るための65章』（中島偉晴 [ひではる]、メラニア・バグダサリヤン編著、明石書店2009:21）によれば、アルメニアの大まかな地理的な位置づけは、西に黒海（トルコ）と東にカスピ海（アゼルバイジャン）、北にロシア（グルジア）、南にイランとなる。古くからいくつもの王朝に支配され、分断されてきたため、アルメニア人は全世界に、ディアスポラとして離散している。『アルメニアを巡る25の物語—駐日大使が語る遠くて近い国、古くて新しい国—』（グラント・ポコシャン、和器出版2017:121）によれば、海外に住むアルメニア人は、約700万人いるという。と同時に、国内には、321万人（2001年現在）の人口がいて、1.8%ほどの少数民族（クルド人やロシア人）を抱えてもいる。

527頁に及ぶ大著『アルメニア人の歴史』（藤原書店2016:29）を書いたジョージ・ブルヌティアンは、「アルメニアをたくさんの谷間に分断している無数の山々が、歴史の大部分において、強力な中央集権的指導者のもとで統一国家が樹立されることを妨げた」と、その地勢的な条件と社会の成立を関連付けてもいる。

同じような文脈で、『アルメニア近現代史—民族自決の果てに—』（東洋書店2009:60）を書いた吉村貴之も、「政治的な迫害や、政策的な移住によって、絶えず民族の移動が繰り返されただけでなく、その社会は必ずしも一枚岩ではなかった」としている。このように、一枚岩的な中央集権が生まれにくい条件下で、人々はどのように生き延びてきたのか。吉村貴之は、言う。「民族離散を決定的にしたこの事件を、悲劇として共有できる者を、アルメニア人という」（吉村2009:60）。言うまでもなく、この事件とは、隣国トルコによる、第一次大戦下のあの虐殺である。イスラム教徒に囲まれたキリスト教国が、その悲劇を国民のアイデンティティの基盤におくとは、悲壮な決意であり、並々ならない覚悟であるとも言える。

ジョージ・ブルヌティアンは、「大惨事を生き延びた者たちは生き残ったことの罪に苦しみ、彼らの文学的な反応は非常に共通していた」（ブルヌティアン 2016：300）とし、直接ことばで語りえない心情を、そして、簡単には語り尽くせない胸の内を、文学という形式が表現していると指摘する。竹内敏晴を、そして、われわれを魅了したウィリアム・サロイヤンの文学にも、そのような水脈が流れているのかもしれない。

注1：サロイヤンは、「サローヤン」と書かれることもある。江草久司編註『サローヤン短編集』成美堂 1982、古沢安二郎翻訳『サローヤン短篇集』新潮文庫 1958、杉山忠一註解『サローヤン短編集』学生社（出版年不明）、など。なお、ウィキペディア（2019-10-10）によれば、サロイヤンには、小説 22 点、戯曲 7 点の著作があるという。

注2：「- an」という語尾は、「-の子」という意味で、アルメニア人固有の名前である、という。

注3：「ナゴルノ」とは、「山岳」という意味がある。

注4：ところが、このアゼルバイジャンの首都バクーには、祖国から逃れてきたチェチェン人ジャーナリスト、ザーラが亡命生活をしている、という（姜信子 [きょう・のぶこ]、ザーラ・イマーエワ『旅する対話—ディアスポラ・戦争・再生』春風社 2013）。アゼルバイジャンに向けて銃をとる、アルメニア人の David 君とアゼルバイジャンに亡命中のザーラとの出会いは、この上ない悲劇だ。